


「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2019年 7 月 20 日

所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	義村 弘仁

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)	
日本モンキーセンター	
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
Zoo/Museum course	
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)	
2019年 7月 17日 ~ 2019年 7月 19日 (3日間)	
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
日本モンキーセンター、キュレーター/野生動物研究センター特定助教、新宅勇太氏	
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)	
<p>写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p>	
<p>愛知県犬山市の日本モンキーセンター(以下JMC)において実習を行った。</p> <p>1日目はJMCの歴史や動物園の役割について学び、標本作成を見学した。</p> <p>2日目は飼育担当者の業務を体験し、JMCの展示や施設を見学した。</p> <p>最終日には、獣医の業務を見学し、動物園における教育に着目して来園者調査実習を行った。</p> <p>動物園は本質的には博物館であり、展示物が生きているかどうかの違いしかないというのは納得できることだった。海外では、学会によって運営されている動物園もあるというのが驚きだった。博物館でもあるJMCでは膨大な数の標本の管理や新たな標本の作成をキュレーターが行っており、並並ならぬ労力が展示の裏にあることを知った。標本は収集・保管するだけでは意味がなく、研究・教育等に利用して初めて価値を持つという話が印象的であった。</p> <p>また、飼育担当者の方々と話す中で、飼育担当の方々も現在の飼育環境に満足しているわけではなく、限られた時間や予算の中で、飼育動物のためにどれだけのがしてあげられるかを常に考えていることを知った。研究者は研究によって問題点や理想の飼育環境を明らかにすることはできるが、理想論にしないためにはその結果を現場でどう活かすかを考えることも、動物園で調査を行う上で非常に重要なことだと感じた。</p> <p>動物園の役割として教育も非常に重要である。教育である以上、一方的な情報伝達でなく、可能な限り相互的であるべきだと考える。掲示物に関しても来園者が見ているのか、見て何を思っているのかを知ることは不可決なことだろう。実際に動物園側が伝えたいメッセージが本当に来園者に届いているかを測るために来園者調査は有効だと思った。JMCではそれぞれの飼育担当者が業務の合間を縫って短時間のガイドを行っており、情報を発信しようとする努力を感じた。実際に来園者調査を行った際も、飼育担当者が来園者とコミュニケーションをとることは来園者の興味を引き出し、より多くの情報を伝えることを可能にすることを実感した。</p>	
	
<p>図：施設見学の様子</p>	
<b>6. その他</b> (特記事項など)	
<p>&lt;平成26年5月28日制定版&gt; 提出先：<a href="mailto:report@wildlife-science.org">report@wildlife-science.org</a></p>	